

植物の生育と環境

植田国夫

I. はじめに

現在の十勝には自然もまだ、沢山残されている。しかし、農薬による汚染もかなり進行している事実はある。畑作地帯の植物は枯れ、昆虫の数もめっきり減る姿が見られる。また、特に近年、帰化植物であるアラゲハンゴンソウ、セイダカアワダチソウが豊頃から幕別への国道沿いに見られ、ヨシやススキ、ヨモギの群落に影響を与え、退潮させている。厚内市街を離れるところでも、ホソバウンランが大変な勢いで繁殖している。この厚内

に住んで1年7ヶ月、海岸の植物に触れ、春から秋まで、花の移り変わりを楽しみ、味わいながら生活しています。この地で生活する以上、人を愛し、自然を愛し、長いつき合いをしていきたいものです。

II. 植物の群落と環境

1. 調查地

厚内小学校前に、昭和53年港湾建設事業において、浚渫作業によって得られた砂が約3,240 m³にイワガリヤスの群落

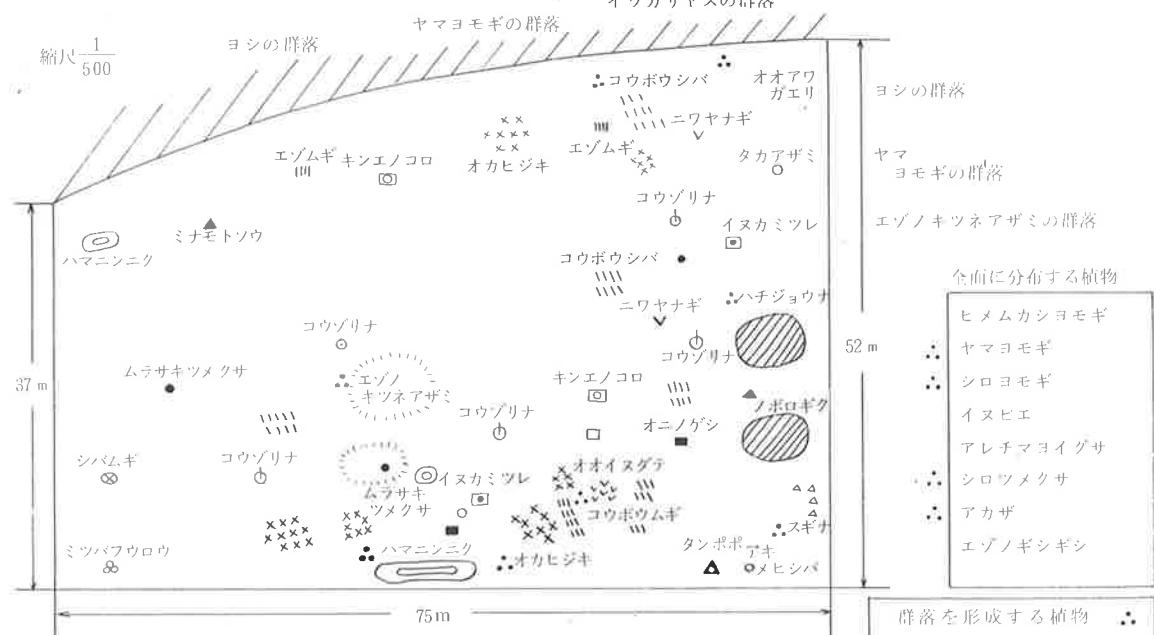


Fig. 1 昭和55年度堆積砂地の植物の分布と群落

目 次

植物の生育と環境	植田国夫	2
1916(大正5)年8月15日の大火と街並み形成	鈴木智子・後藤秀彦	8
十勝地域考古学関係文献目録—1861~1980—	佐藤訓敏編	15
自然保護と開発	米司綾逸	25

表紙写真：チフラウレシトウチャシと豊頃町No35遺跡と十勝坊主群 この付近は松浦武四郎が東蝦夷日誌第7編に記している湧洞沼と長節沼の中間点である。2基のチャシ（？）、17の竪穴、幾千という十勝坊主が集中し、見事な景観をくり広げている。
(後藤秀彦)

わたり堆積してあります。その堆積砂に昭和54年から昭和55年の2年間、調査地と定めたものです。

2. 調査の方法

堆積砂地 3,240 m² の植物の種類、生育型、砂地に見られる植物の特徴について調査したものである。

(1) 植物の分布と群落

Fig. 1 は、昭和55年度の植物の種類と分布を示すものである。昭和54年度、6種類の植物（ヨモギ・シロヨモギ・アレチマツヨイグサ・シロツメクサ・エゾノギシギシ）が数株づつと、アカザが全面を覆い、塩分と乾燥に耐える生命力の旺盛さを示してくれた。そして、今年度は31種の植物と12種類の小群落を形成するに至ったことはFig. 1 に示すところである。

(2) 成育型

草本植物の地上部の形態によりFig. 2 のように分類する。

e 直立型 地上部の主軸のはっきりした直立性のもの。アカザ、ヨモギなど。

r 口ゼット型 直立しているが、花茎だけでは根生葉のもの。タンボボ、オオバコなど。

Pr 部分口ゼット型 一時期は口ゼット型で後に直立型に変るもの。ヒメジョウソウ、アレチマツヨイグサなど。

P ほふく型 地上をはって根をおろすもの。シロツメクサ、オランダイチゴなど。

t くさむら型 株をつくるもの。カモガヤ、スキなど。

b 分枝型 地上部の主軸がはっきりせず、枝分れしているもの。ハコベ、ナデシコなど。

l つる型 つる植物。アサガオ、クサフジなど。

ど。

(3) 堆積砂地の植物の種類、生育型、帰化植物、海岸地の植物、主な生育地について

昭和55年度

No.	植物名	科	生育型	帰化植物	海岸の植物	主な生育場所
1	ヒメムカショゴミ	キク科	e	○		荒地・川原
2	タンボボ	タ	r			草原・荒地
3	ハチジョウナ	タ	e			道端・海岸
4	タカアザミ	タ	e			湿った草原
5	ノボロギク	タ	e	○		庭
6	ヤマヨゴミ	タ	e			荒地・道端
7	イヌカミツレ	タ	e	○	○	砂浜
8	シロヨモギ	タ	e		○	砂浜
9	エゾノキツネアザミ	タ	e	○		道端・荒地
10	コウヅリナ	タ	Pr	○		荒地
11	キンエノコロ	イネ科	t	○		荒地・道端
12	シバムギ	タ	t	○		荒地・道端
13	アキメヒシバ	タ	t	○		荒地
14	コウボウムギ	カヤツリグサ科	t		○	砂浜
15	オオアワガエリ	イネ科	t	○		草原・荒地
16	エゾムギ	タ	t			草原・道端
17	イヌビエ	タ	t			畑
18	ハマニンニク	タ	t		○	砂浜
19	オニノゲシ	キク科	e	○		荒地
20	アレチマツヨイグサ	アカバナ科	Pr	○		荒地
21	ミナモトソウ	バラ科	e			湿地
22	ムラサキツメクサ	マメ科	e	○		草原・荒地
23	シロツメクサ	タ	P			草原・荒地
24	スギナ	トクサ科	e	○		湿地
25	ミツバフウロ	フウロソウ科	b			山地
26	オカヒジキ	アカザ科	e		○	砂地
27	アカザ	タ	e	○		畑・荒地
28	オオイヌタデ	タデ科	e			水辺
29	ニワヤナギ	タ	e			庭・道端
30	エゾノギシギシ	タ	Pr	○		荒地

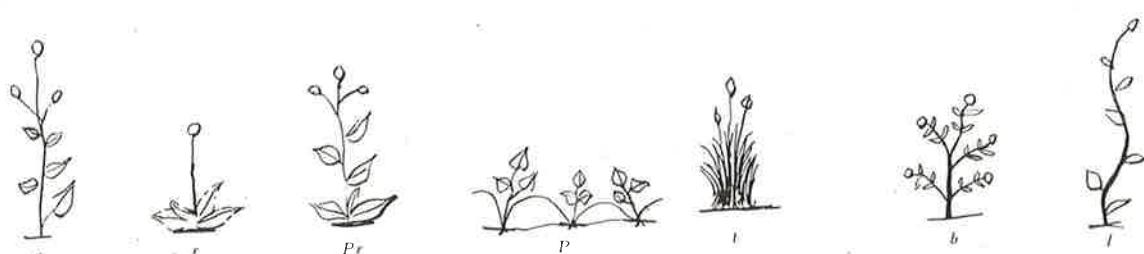


Fig. 2 生育型の模式図

31	コウボウシバ	カヤツリ グサ科	t	○	○	砂浜
----	--------	-------------	---	---	---	----

昭和54年度

No.	植物名	科	生育型	帰化物	海岸の植物	主な生育場所
1	ヨモギ	キク科	e			荒地・道端
2	シロヨモギ	ク	e		○	砂浜
3	アレチマツヨイグサ	アバナ科	Pr	○		荒地
4	シロツメクサ	マメ科	P	○		草原・荒地
5	アカザ	アカザ科	e	○		畠・荒地
6	エゾノギシギシ	タデ科	Pr	○		荒地

(4)草丈

植物を調査するとき、草丈はFig. 3 のように測定する。

(5)植物の特徴図説(Fig. 4)

ここでは、砂地の植物20種をとりあげ、生育型や特徴を図解してみました。本来なら、同種の植物を内陸と砂浜、高地と砂浜と対比して図解したなら、より特徴が理解されるのですが、資料をもちあわせていません。そこで、この砂地の植物の根の太さ、長さ、広がり、草丈、枝の広がり、群落等に配慮し、スケッチしたものです。

尚、特徴は簡単に書き添えてみました。

●タンポポ(キク科)(Fig.4-1)

1株しか見当らない。主根は太く、障害物がなく直ぐに伸びる。

●ハチジョウナ(キク科)(Fig.4-2)

20株ぐらいの群落を2つくる。茎・葉とも小さくひ弱。

●コウゾリナ(キク科)(Fig.4-3)

周りには大きな植物がなく、茎の広がりは50cm

余にもなる。荒地の植物に比べひ弱である。

●キンエンコロ(イネ科)(Fig.4-4)

草丈18cmくらいでひ弱である。

●アレチマツヨイグサ(アカバナ科)(Fig.4-5)

今年発芽したばかりで葉は地面につく。根の太さが特に目立つ、全面に点在する。

●アレチマツヨイグサ(アカバナ科)(Fig.4-6)

周囲に大きい植物がなく、茎の広がりが目立つ。主根は1年生に比べ細い。

●アキメヒシバ(イネ科)(Fig.4-7)

1株しか自生していない。草丈も3cmと低い。

●ムラサキツメクサ(マメ科)(Fig.4-8)

根粒菌は2個で荒地に自生するものに比べて、極めて少ない。

●シロツメクサ(マメ科)(Fig.4-9)

無数の根粒菌をもつ。円形群落は春に比べどれも倍以上の成長を示す。地上をはって群落を伸ばす。

●スギナ(トクサ科)(Fig.4-11)

栄養茎の節部から枝が輪生状につける。節には舌状葉がさや状にゆき着してついたもの。砂地が乾燥してきているので消滅しつつある。

●ミツバフウロ(フウロソウ科)(Fig.4-12)

1株自生する。茎の下部は地面に伏せ上部は立ち上がる。葉は三深裂する。

●アカザ(アカザ科)(Fig.4-13)

1年にして全体を覆う繁殖力。生命力旺盛。草丈50~70cmくらいで、大小はきわめて稀。9月初旬の紅色は美しい。

●ニワヤナギ(タデ科)(Fig.4-14)

校庭、草原など周囲にいっぱい群落があるが、

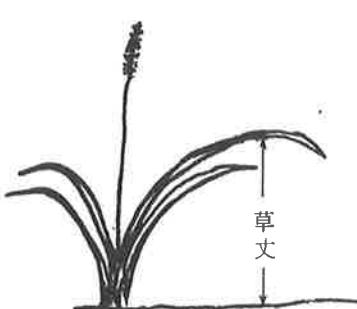
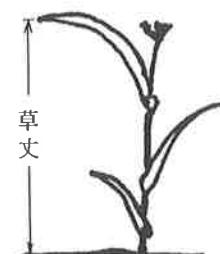
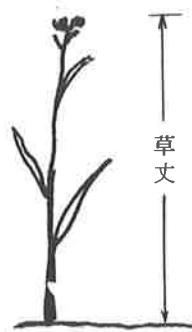


Fig. 3

草丈の測定



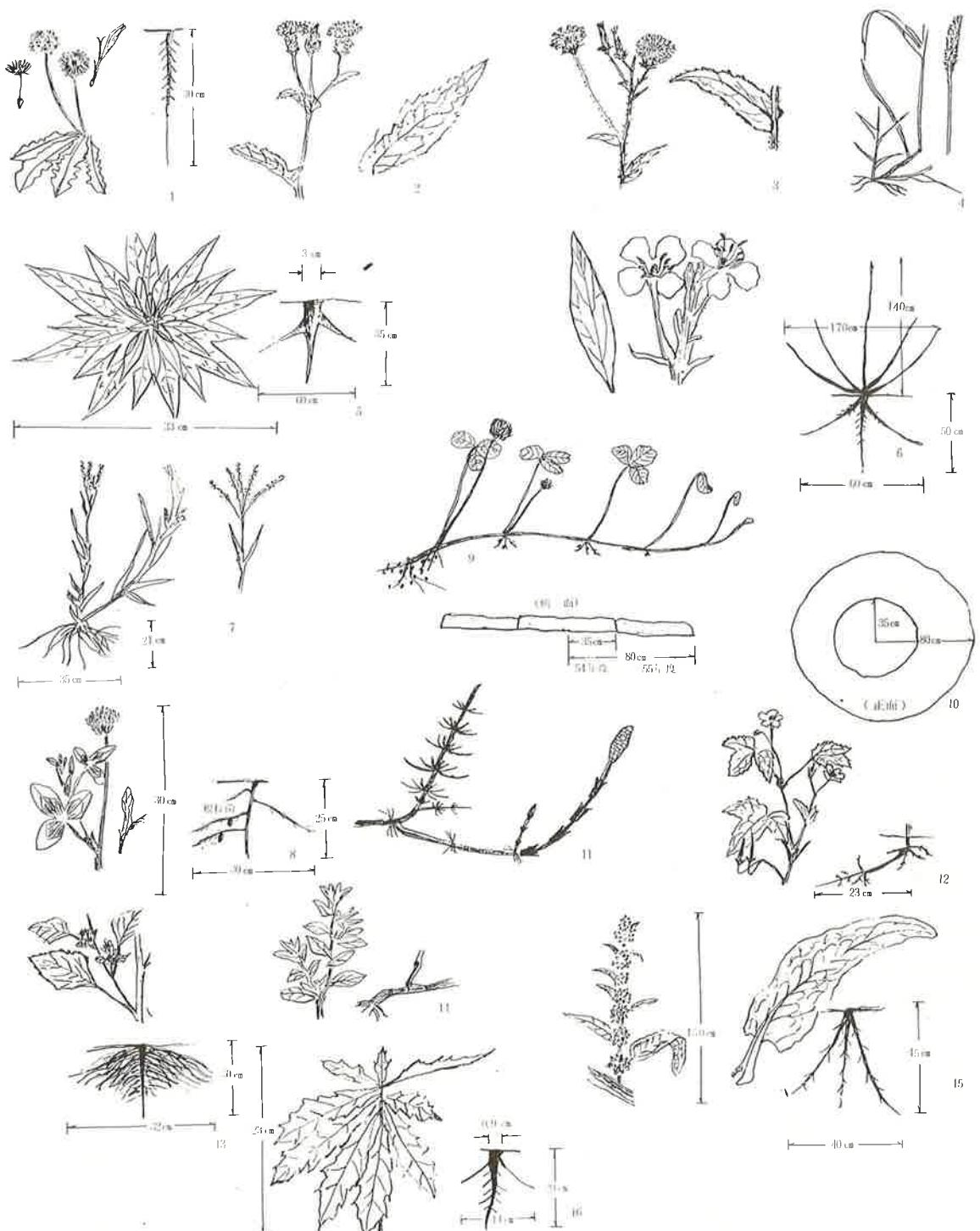


FIG. 4 妙地植物の特徴図説 (1 : タンポボ 2 : ハチジョウナ 3 : コウゾリナ 4 : キンエノコロ 5 : アレチマツヨイグサ 6 : アレチマツヨイグサ 7 : アキメヒシバ 8 : ムラサキツメクサ 9 : シロツメクサ 10 : シロツメクサの円形群落 11 : スギナ 12 : ミツバフウロ 13 : アカザ 14 : ニワヤナギ 15 : エゾノギシギシ 16 : エゾノキツネアザミ)

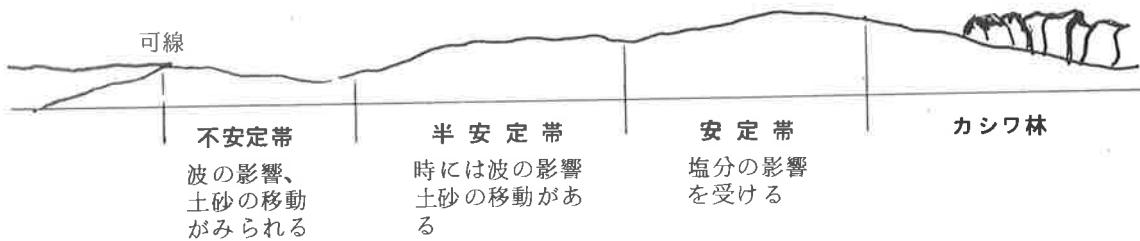


Fig. 5 海浜砂丘植物群落の植生帯

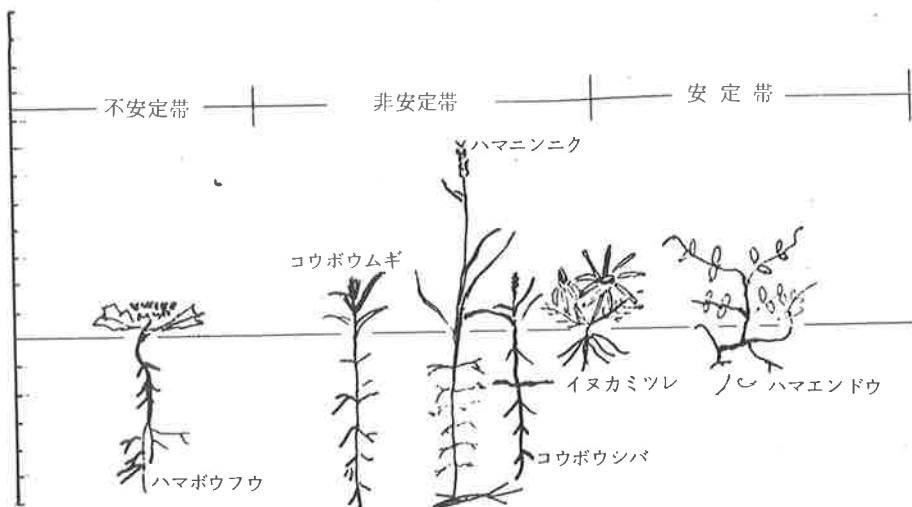


Fig. 6 海浜植物の群落モデル

ここには2株しかない。

●エゾノギシギシ（タデ科）(Fig.4-15)

1年目にして25株確認。今年度は更に植え、50株になる。根は太くて長く、強靭である。名前からは北海道原産におもえるが、ユーラシア生れである。

●エゾノキツネアザミ（キク科）(Fig.4-16)

未だ花をつけない。根は太い。草丈も荒地や道ばたの程度。

III. 環境の違いと海浜植物

1. 海浜植物の調査

本来なら海浜植物を調査するには、砂丘の変化、風、海水、塩分と植物の根・茎・葉に及ぼす影響について調べる必要がある。しかし、ここでは堆積砂地の環境における植物の生育調査が目的なの

で、調査方法、群落モデル、特徴の図説を、堆積砂地の植物の中の海浜植物について書きたい (Fig.5・Fig.6)。

2. 海浜植物の図説

●イヌカミツレ（キク科）(No.7)

草丈は荒地や庭に自生する程度。根はひげ根のような伸びを示す。安定帶の植物。

●シロヨモギ（キク科）(No.8)

根の広がりに大きな特徴を示す。葉、茎とも白っぽく海浜の植物で特に目立つ。安定帶の植物。

●コウボウムギ（カヤツリグサ科）(No.14)

草丈小さく全体粗剛である。葉はわん曲し強靭で広線形。半安定帶の植物。

●ハマニンニク（イネ科）(No.18)

大型の植物で常に群落をつくる。茎・葉は強靭。半安定型の植物。

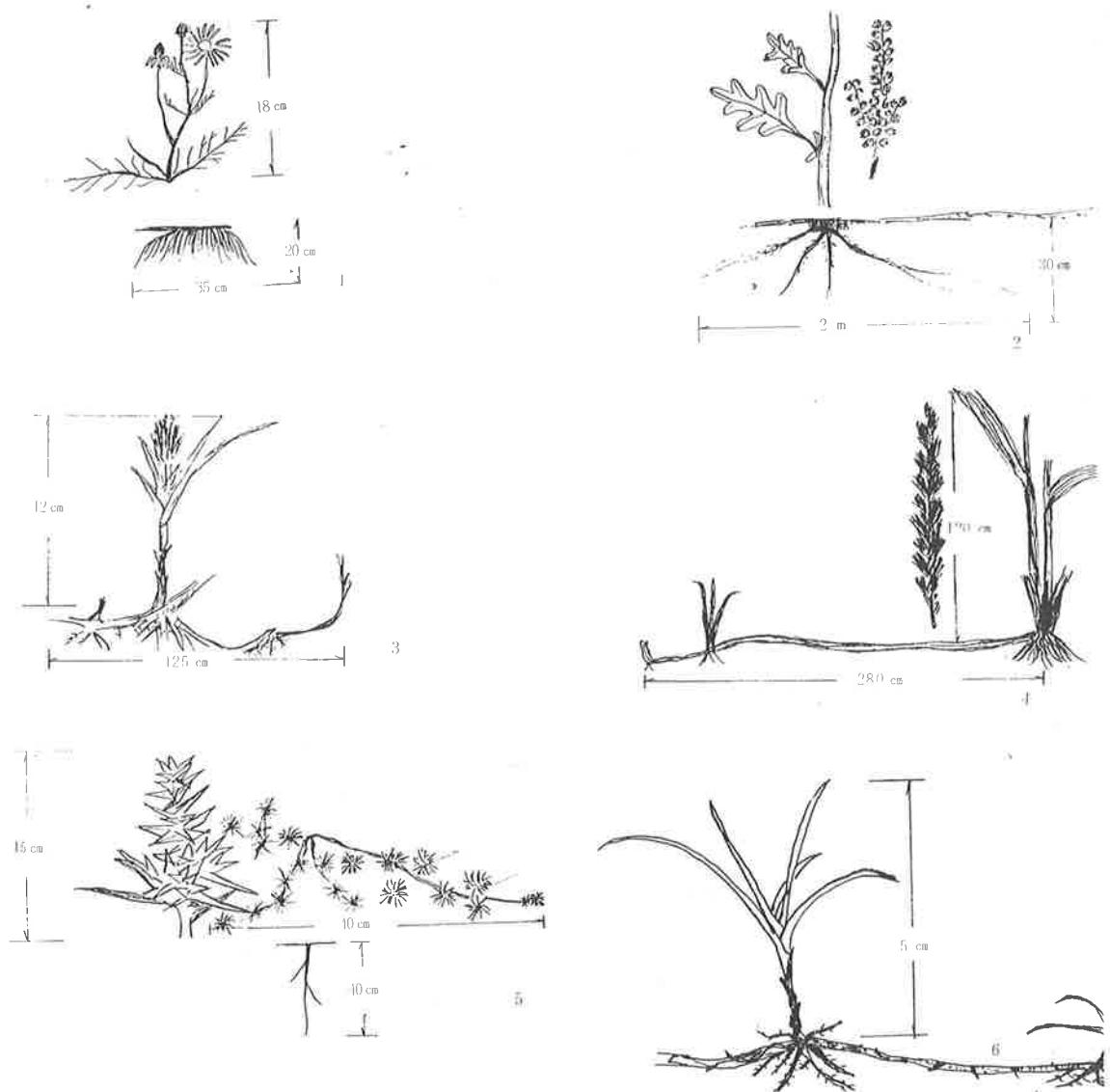


Fig. 7 海浜植物の特徴図説 (1:イヌカミツル 2:シロヨモギ 3:コウボウムギ 4:ハマニンニク
5:オカヒジキ 6:コウボウシバ)

●オカヒジキ (アカザ科) (No.26)

茎は普通斜めにたおれ広がる。葉は肉質で線状円柱形で先は尖っている。安定帶で多くみられる植物。

●コウボウシバ (カヤツリグサ科) (No.31)

太く長い地下茎をもつ。草丈低く花穂はない。茎は三陵角で直立する。半安定帶の植物。

IV. 結び

2カ年で堆積砂地は一面植物に覆われた感があ

る。海底から採取した砂には多くの塩分を含んでいるにも拘わらず、環境に耐えて旺盛な繁殖力と生命力を表わしている。その代表的な植物はアカザで全体を覆い、次いでオオアワガエリ、アレチマツヨイグサ、シロツメクサ、シロヨモギ、オカヒジキ等が傑出している。しかし未だ未だ地表空間はある。3年目はどんな植物が現われ、どのように生育し、群落はどう変遷するか楽しみである。この地に住む限り記録をとり続けたい。

尚、仕事の関係上、数日でまとめましたので、

要領の得ない点も多々あろうかと思いますが、御容赦下さい。
(浦幌町立厚内小学校教頭)

参考文献

『牧野新日本植物図鑑』
『理化教育現代化講座』(道立理科センター)
『小柳省三氏研究集録』

1916(大正5)年8月15日の大火と街並み形成

鈴木智子・後藤秀彦

I. はじめに

1900(明治33)年を開基とし、本年80周年を迎えた我町「浦幌町」も過去数度の大きな災害を被っている。中でも、開村間もない1916(大正5)年の市街地大火と1952(昭和27)年の十勝沖地震は未曾有の被害を及ぼし、現在でも町民の語り草となっている。この2件の災害は、時折農耕地等を襲った洪水と異なり、中心市街を直撃した点に特徴があると言えよう。

また、1916年の大火と1952年の十勝沖地震とを比較したとき、後者はその資料が比較的整っているのに対し、前者の資料は皆無に近く、間宮不二雄が『浦幌村五十年沿革史』の中でわずかに触れているだけであり、この大火を直接体験した人達も高齢となって調査研究の行き届かない面が多々あった。

筆者ら浦幌町郷土史研究会では、会創設当初からこの点に着目し、調査をすすめ「昭和54年度浦幌町郷土博物館特別展」の際『大正5年のうらほろの街並み形成』と題して、その調査の一端を公表したところであるが、その後も町内外各氏から資料の提供を賜わり、ようやく発表できる段階に入ったので、ここにその結果を公表する次第である。

大火の発生した頃、すなわち1916年頃の浦幌は1903(明治36)年12月25日に開業した釧路線浦幌駅(釧路鉄道管理局、1972)周辺に旧生剛市街からの転居者が相次ぎ、駅前通りを直線としそこからT字形に家が建ち並び、その戸数も60戸を数えるに至った時期と言われている(間宮、1949)。

1916年8月15日の大火は、この未来に向って歩き始めた最初の大きな試練であった。その後、1918年1月7日午前にも村役場の火事(間宮、1949)もあったが与えた被害の大きさは比較にならなか

ったと言える。この2度の大火で1918年以前の貴重な資料、特に行政文書の殆どは灰燼と帰してしまった。したがって、本町の開村前後の歴史を探ろうとするとき、基本的史料の不足が決定的致命となって非常な困難を余儀なくしている。

筆者らは、この小文でこの大火のあらましとこのとき被災された方々を中心として当時の街並み形成の概要を述べてみようと思う。

なお、この報文をまとめるにあたり高松與次郎・中川政雄・吉川利昌・北村慶蔵・斎藤有・山本きの・黒川とみの各氏に貴重なお話しを伺い、また帯広市新田正雄・浦幌町福原仁子の各氏には文献等のご紹介をいただいた。ここに銘記して感謝申し上げる。

II. 1916(大正5)年8月15日の大火について

この大火について触れている史料は、管見の範囲ではFig. 1に示した『北海タイムス』(現・北海道新聞)の報道記事と『浦幌村五十年沿革史』(間宮、1949)があるだけである。『北海タイムス』では、この大火の模様を翌々日の8月17日に次のように報道している。

浦幌大火

- ▶ うら盆の灯から
- ▶ 43戸を焼失

一昨日午後八時半浦幌停車場通木材人夫頭清水金次郎方より発火し折柄南東の風烈しく見る見る一瞬火炎に包まれ井水の不備と消防設備なきとに依り見す見す郵便局営林区駐在署を舐め盡し停車場前角久保田運送店まで四十三戸焼失し翌午前一時鎮火したり原因はうら盆の事とて盆棚に灯を上げたるより起りし者なり池田分署長等直に出張して村長其他有志と計り炊出しを為し一方小屋掛け